

玉川学園同窓生 吹奏楽ミーティング

Dream Band Meeting Concert

VOL.
20

ドリームバンドミーティングコンサート

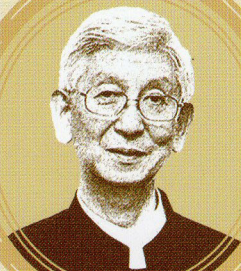
2025 9.20 (土) 13:30 開場 | 町田市民ホール
14:00 開演



主催

ドリームバンド

dream_band_2003@yahoo.co.jp



田中 旭

1967年、国立音楽大学器楽科クラリネット専攻卒業、翌1968年 同専攻科修了。

教諭として東京都品川区立荏原第二中学校に着任し、1971年に吹奏楽部を創部するとともに、1972年から1977年まで東京都吹奏楽連盟理事を務める。1977年 玉川学園女子短期大学に着任し、玉川大学吹奏楽団常任指揮者に就任。以来、34年間にわたり同吹奏楽団を指導し、2005年に吹奏楽コンクール全国大会金賞に導き自らも指揮者賞を受賞。1999年、イーストマン音楽大学、コロラド大学、デンバー大学のクリニックに参加、2009年にはシカゴで開催された「ザ・ミッドウェスト・クリニック」に参加、研鑽を積む。クラリネットを大橋幸夫、小笠原長孝。室内楽を伊達良。音楽教育学法を岡本敏明、高森義文。指揮法を村方千之の各氏に師事。吹奏楽コンクール、アンサンブルコンテスト審査員に多数招聘された他、吹奏楽や合唱の指導者として多方面で活躍しており、その指導には定評がある。

元玉川大学教育学部教授。元独立行政法人教員研修センター監事。現在、公益社団法人日本吹奏楽指導者協会関東甲信越支部長、同協会神奈川県支部長、日本管打・吹奏楽学会々員、日本クラリネット協会々員、川崎吹奏楽団常任指揮者、玉川大学吹奏楽団名誉指揮者。



三浦 博司

玉川学園中学部、高等部時代、吹奏楽部に所属(トロンボーン)。大学時代は、同好会として十数名で吹奏楽の活動をする傍ら、管弦楽団のヴェートーベン「交響曲第九番」、ドヴォルザーク「新世界」の演奏会に参加。また、中学部、高等部吹奏楽部の指導にあたる。玉川大学文学部教育学科卒業後、大和市立小学校に着任(2009年 退職)。

在任中、合唱教育研究会神奈川大会、関東音楽教育研究会、少年少女合唱指導者研修全国大会に参加し、研鑽を積む。これまでに市教育研究会音楽部部長、神奈川県教育研究会理事(音楽部)、教科指導員(音楽)、音楽実技研修(講師)、中学校吹奏楽部の指導などを歴任。小学校退職後は、市内小学校の合唱、合奏、リズム、リコーダー等の指導を通して後進の育成も行っている。



長谷部 啓

1982年玉川大学文学部芸術学科音楽専攻音楽教育卒業。卒業と同時に玉川学園中学部音楽科教諭に着任し、1999年より玉川学園高等部音楽科教諭として音楽教育の実践と研鑽を積む。在職中、吹奏楽部の顧問・指揮者として全日本吹奏楽コンクール(中学の部・高校の部)や全日本高等学校吹奏楽大会in横浜、東日本学校吹奏楽大会に東京都代表として出場。また、1998年東京交響楽団とのジョイントコンサートは児童福祉文化賞舞台芸術部門推薦作品に選ばれ、厚生大臣賞を受賞。国際舞台では、2005年オランダ・ケルクラード開催「第15回世界音楽コンテスト」吹奏楽部門にて金賞(第1位)を受賞。2011年台湾・嘉義市で行われた「第15回世界吹奏楽大会・WASBE」に日本代表として招待演奏。2013年オーストリア・ウィーンで開催された「スナ・クム・ラウデ国際青少年音楽祭ウィーン2013」において、最高位のSumma Cum Laude(第1位)を受賞。

指揮法を村方千之氏に師事し、吹奏楽コンクール、アンサンブルコンテストの審査員のほか、吹奏楽・管弦楽の指揮、指導者として活動している。

現在、玉川学園音楽科講師、玉川大学吹奏楽団顧問、玉川大学脳科学研究所特別研究員、Bell Ring Wind Orchestra 常任指揮者、東京都高等学校吹奏楽連盟副理事長、東京都吹奏楽連盟理事。

元玉川学園高等部長・教育部長(6-12年)、元玉川大学・玉川学園国際教育センター副センター長、元全国私立大学附属併設中学校高等学校教育研究会幹事。

メンバー

◆ Flute & Piccolo

足立麻里
今城晃子
神田晴子
島津美佳
立花由紀子
友田晶子
松本篤子
吉澤和弘

◆ Oboe

佐々木恭子
佐野陽子
鈴木尚子

◆ Clarinet

荒井優子
石川香織
伊藤幹子
大山瑞希
梶原綾子
酒井朝子
櫻井美代子
佐々木淳
島健太郎
島田寛子
清水健一郎
関根啓子
田中仁浩
田中美佳
長谷川正子
前田絵理
三浦実穂
門田喜実代
綿引美智代

◆ Fagotto

金子慎太郎
神本浩子

◆ Saxophone

清水恵介
東海林太
新崎優子
杉田絵理
鈴木紳一郎
竹内正則
対馬尚子
政岡和佳

◆ Trumpet

北村謙見
田中聖
出浦香織
細川宏幸
山崎岳彦
山根大幹

◆ Horn

宇佐日出人
古立康三
小林幸子
近藤宣
竹中文子
飛田佳子
中村剛
西牧瑛衣美
原田章二
福澤達
町田玲奈
三好徹史
森澤格
綿引博章

◆ Trombone

小宮隆一
小室洋平
武田久里
館野綾
三浦博司
渡邉圭輔

◆ Euphonium

東道隆
石井実希
茶谷智太郎
◆ Tuba
小澤正憲
坂田勇
澁谷明奈
長友裕之
藤田良明
山田洋平

◆ Percussion

大崎千智
太田峻平
大原明日香
小林典子
庄子真美
鈴木海心
成瀬綾
間瀬陽子
森田優子
八木実香

◆ StageManager

味曾野 輝章

◆ MC

近藤 千尋

◆ Staff

青木美子
尾崎伸二
坂巻早苗
竹内浩美

(リフレット・チラシ制作)
八木美澤

次回の
ご案内

第21回 ドリームバンドミーティングコンサート

日時 2026年9月22日(火・国民の祝日) 開演 14:00(予定)

会場 町田市民ホール 入場無料

ごあいさつ



本日は第20回ドリームバンドミーティング演奏会へようこそお越しくさいました。こうして皆様を会場にお迎えできますこと、メンバー一同、心より感謝申し上げます。ドリームバンドは、2003年に開催された「玉川大学コスモス祭」での演奏をきっかけにその歴史をスタートさせました。当時の玉川学園卒業生たちが「かつての仲間と、もう一度楽器を手に合奏したい!」という熱い想いを抱き、年に一度、顔を合わせる吹奏楽ミーティングとして結成されたのが始まりです。以来、この演奏会は私たちにとってかけがえのない大切な場となり、皆様の温かいご支援のおかげで今年は記念すべき20回目の演奏会を迎えることができました。結成から数えると22年もの歳月が流れたことになります。毎年春にメンバーを募り、それぞれが仕事や家庭と両立しながら個人練習を重ねています。全体での合奏練習は本番直前の数回のみに限られてしまうため、至らぬ点や、お聴き苦しい箇所もあるかもしれません。しかしながら、本日このステージに立つメンバー全員が、この日のために心を込めて準備をまいりました。玉川学園で培った音楽への情熱と、仲間と共に奏でる喜びを、精一杯の「玉川サウンド」として皆様にお届けいたします。どうか最後までごゆっくりとお楽しみいただければ幸いです。

玉川ドリームバンドメンバー 2025 一同

1st Stage

音楽祭のプレリュード

A Festival Prelude

(A. リード)

シンバルの一打とともに、金管のファンファーレが鳴り響く曲の幕開け。

何年経っても吹奏楽が大好きなドリームバンドの今回のオープニング曲ですが、なんと玉川大学吹奏楽団の記念すべき第一回演奏会(1976年)もこの曲から始まりました。この時に大学1年生であった学生は1957年度生まれ。アメリカの吹奏楽の巨匠A. リードがこの「音楽祭のプレリュード」を作曲した年です。感慨深い縁を感じます。先生方をはじめ、ここにいる団員一人ひとりが最も多く演奏したといっても過言ではありません(令和世代には当てはまりませんが)。この曲は1970年全日本吹奏楽コンクールの課題曲(中学部門以外)でもありました。そのため現在70歳を越えた吹奏楽仲間には、課題曲として必死に練習した貴重な思い出もあることと思います。

吹奏楽の持つ全てのエッセンスを5分弱に凝縮した愛すべきこの曲の醍醐味は、この演奏会ラストを飾る「アルメニアン・ダンス パート1、パート2」にも引き継がれます。心ゆくまで、A. リードの魅力を感じていただければ嬉しいです。〈Y. M. 〉

我が心のフォスター

Foster on My Mind

(S. フォスター／編曲・星出尚志)

本曲は、アメリカの作曲家S. フォスターによる名旋律の数々を、日本の作編曲家・星出尚志が吹奏楽用に編曲した作品です。S. フォスターは「故郷の人々(スワニー河)」「夢路より(Beautiful Dreamer)」「おおスザンナ」など、19世紀アメリカを代表する数多くの名曲を残しました。星出氏の編曲は、それらの旋律を美しく織り交ぜながら、現代の吹奏楽ならではの豊かな響きと表現力を引き出しています。親しみやすいメロディーと温かな音色が心を打ち、アメリカの郷愁や人々の情感が生き生きと描かれるこの作品は、演奏会のレパートリーとしても高い人気を誇ります。S. フォスターの魅力を再発見できる、情緒あふれる編曲作品です。〈M. A. 〉

ロンドンデリーの歌

Irish Tune from County Derry

(P. グレインジャー)

アイルランド民謡をもとにP. グレインジャーが編曲した作品です。讃美歌第二編157番・229番は、この曲に歌詞がつけられたものになります。

「アルメニアン・ダンス」も民謡をモチーフとしていますが、「技巧」と表現したくなる演奏技術を駆使する作品です。対照的に「ロンドンデリーの歌」は曲中に8分音符が6回、16分音符はたったの1回しか登場せず、「歌う」ことが求められます。

玉川学園の教育12信条のうち「全人教育」は広く知られていますが、9番目に「反対の合一」があります。公式サイトでは『国民と国際人、個人と社会人、理想と現実、自由とルール。これらの反対矛盾対立する二面を一つに調和していく試みに挑みたいものである』と説明されています。

「ロンドンデリーの歌」と「アルメニアン・ダンス」のそれぞれの背景は、内陸地と海に囲まれた地、アイルランド語とアルメニア語、明快なリズムと変則的なリズム、などの二面性を持ち合わせています。そして何より、「技巧」と「歌う」の両立も「反対の合一」に通じる私たちの強みだと考えています。〈R. M. 〉

アルセナール

ARSENAL Concert March

(J. ヴァンデルロースト)

J. ヴァンデルローストは、母国ベルギーのレマンズ音楽院で教授職を務め、後進の育成に務める傍ら作曲活動をおこなっています。世界中の団体から作曲依頼があり、数年先まで予定が埋まっているほどで、吹奏楽界で最も人気がある作曲家の一人です。さらに、優秀な指揮者としても知られ、日本にも何度か招かれて客演指揮者を務めたこともあります。

本日演奏する「アルセナール」はJ. ヴァンデルローストの母国にあるバンド、ベルギー・スポールヴェハルセナール吹奏楽団(ベルギー鉄道備蓄所吹奏楽団)の創立50周年を記念して1995年に作曲されました。親しみやすいメロディーを持った、格調高いコンサートマーチです。(R. K.)

オリエント急行

Orient Express

(P. スパーク)

1883年パリからイスタンブールを結び、当時の最高級寝台列車として数々の旅人の思い出を共にしたオリエント急行。豪華絢爛な車内と、移りゆく車窓からの景色は、乗客を極上の時間へと導き、長い鉄道の歴史にも名を残しました。

今回の旅の出発地は、作曲家P. スパークの出身地でもあるロンドンのヴィクトリア・ステーション。汽笛と共にゆっくりと走り出す列車。爽やかな風を受け、そびえ立つ山々を力強く登り、時には長いトンネルを抜けて目的地を目指す風景が目に見えようように展開されます。

一方で豪華な食事とワインで会話ははずみ、新たな出逢いにも心を躍らせる乗客。気づけば移り行く車窓は未知の大地。ほのかな寂しさから、ふと故郷に思いを寄せる哀愁の旋律が歌われます。

もとはブラスバンド作品として、金管楽器の鮮やかなサウンドで生まれたこの作品は、吹奏楽版としてよりシンフォニックな響きとなり絶大な人気を誇っています。

本日は、過去の大事な仲間と共に新たな夢へ向かう旅を、マエストロが素敵に演出してくれるでしょう。(KNSN)

2nd Stage

アルメニアン・ダンス パート1

Armenian Dances Part1

- 第1曲 Tzirani Tzar(アンズの木)
- 第2曲 Gakavi Yerk(ヤマウズラの歌)
- 第3曲 Hoy, Nazan Eem(おお、ナザン、わが愛しき者よ)
- 第4曲 Alagyaz(アラガツ山)
- 第5曲 Gna, Gna(行け、行け)

アルメニアン・ダンス パート2

Armenian Dances Part2

- 第2楽章 HOV AREK(the Peasant's Plea)(風よ吹け)
- 第3楽章 KHOOMAR (Wedding Dance)(フマル)
- 第4楽章 LORVA HOROVEL(Songs from Lori)(ロリ地方の農耕歌)

(A. リード)

「アルメニアン・ダンス」は、イリノイ大学吹奏楽団の委嘱により、A. リードが書いた民謡組曲です。パート1は1972年、パート2は1976年に、双方イリノイ大学吹奏楽団が初演し、出版はそこから2年後の1978年でした。楽器使いのうまいA. リードの新作に当時の私たちはわくわくしました。そしてそれは想像を超える絶大な人気を得て、A. リードの代表作として高く評価されるようになりました。

パート1からパート2の完成までの時間差には、あたかも作曲家が自らの旋律にインスピレーションを得て、壮大な構成に辿り着いたかのような拡がりを感じます。楽曲のコンセプトから、パート1を『1楽章』、パート2を『2楽章～4楽章』として、併せて演奏されることが望ましいのですが、1970年代の日本の吹奏楽演奏会では、吹奏楽の組曲や交響曲などを聴ける演奏会はほぼありませんでした。そこで1980年玉川大学吹奏楽団は第五回定期演奏会で「アルメニアン・ダンスパート1、パート2」を取り上げました。パート2の出版から2年後のことですので、パート1、2を同時に取り上げる演奏会は当時稀だったと思います。

本日もパート1、2を続けてお送りいたします。学生時代に親しんだこの曲を田中先生の指揮で玉川サウンドに包まれて演奏できることを幸せに思います。ところでこの曲の最終楽章は少しA. リードらしくない印象があります。アルメニア人の作曲家A. ハチャトリアン、彼の有名な「剣の舞」のオマージュなのは？と感じるような場面もあります。ともあれ、A. リード・サウンドは随所に表れ、特にサクソフォンと他楽器との絡ませ方は新しい響きとなり、絶妙な情景を生み出しています。古くから紡がれてきたアルメニアの民謡や踊り…その魅力をA. リードは美しく力強く譜面に込めています。平和を祈りつつ、しばしアルメニアの大地、風、人々の生活に思いを馳せながら演奏したいと思います。

(A. M. Y. K. K. S. M. I.)

